横浜植物会
会報
第 255 号
Vol.52,No.4
事務局 〒244-0802
横浜市戸塚区平戸 5-32-41　渡辺 重彦 方
Fax 045-825-2460　〒振替口座　0280-2-13074
E.mail:yoko.syoku1909@gmail.com
令和 3 年 11 月 1 日
横浜植物会ホームページ　http://yoko-syoku.sakura.ne.jp/（変更しました）

コバナムシャリンドウ *Dracocephalum parviflorum* Nutt.

会長　勝山輝男

太田久次氏（1925-2008）は三重県の帰化植物研究家で、1985 年に『三重県帰化植物誌』、1997 年に『改訂三重県帰化植物誌』を出版され、亡くなられた後の 2010 年に遺稿をご遺族が編集されて『新版三重県帰化植物誌』が出されました。2000 年頃にナス科ホオズキ属の同定を頼まれたのが始まりで、その後 2008 年に亡くなられるまで未決標本解明のお手伝いをしました。その一部が未決のまま残されていました。

その未決標本に花序の外見はイヌハッカ（チクマハッカ）*Nepeta cataria* に似て、小形の白色花をつけるシソ科植物がありました。葉は狭楕円形で鋭鋸歯があり、萼裂片は 5 裂して上唇の 1 片のみが大きく、各片の凹部に毛叢がありました。『改訂三重県帰化植物誌』の PL.16（写真 98）や『新版三重県帰化植物誌』の PL.16（写真 143）に写真が出ている植物です。日本産のものや既知の帰化種に思い当たるものはありません。

1960～1980 年代にかけて、四日市周辺では紡績工場のくず羊毛に由来するオーストラリア産植物が多く帰化していたので、オーストラリアのシソ科から調べ始めました。該当するものが見つからなかったので、捜索範囲をヨーロッパや北アメリカに広げました。葉の鋸歯や苞葉がとげとげしく、萼裂片の1片が大きいことからムシャリンドウ属も候補になると思い、ネットで *Dracocephalum* を検索し、ヒットした画像を片端から見ていきました。北アメリカ原産の *D. parviflorum* がよく似ていたので、手元にあった Cronquist et al.（1984）で調べてみると、葉、花序、苞葉、萼、花冠などよく一致しました。

D. parviflorum は北アメリカの合衆国からカナダに広く分布し、西～北ヨーロッパに帰化しています。ムシャリンドウ属はユーラシアに約 70 種があり、北アメリカには本種のみがあります。日本にはムシャリンドウ *D. argunense* が自生し、タチムシャリンドウ *D. moldavica* が神奈川県海老名市に帰化の記録があります。Y-List を *D. parviflorum* で検索するとコバナムシャリンドウの和名があり、引用元の杉本検索誌を見ると「帰化」とありました。しかし、Google で和名を検索したり、帰化植物便覧などを見てみましたが、帰化や栽培の記録は見つかりませんでした。下記標本が日本への確実な帰化の記録になりそうです。

コバナムシャリンドウ *Dracocephalum parviflorum* Nutt., Gen. N. Amer. Pl. 2: 35. (1818).

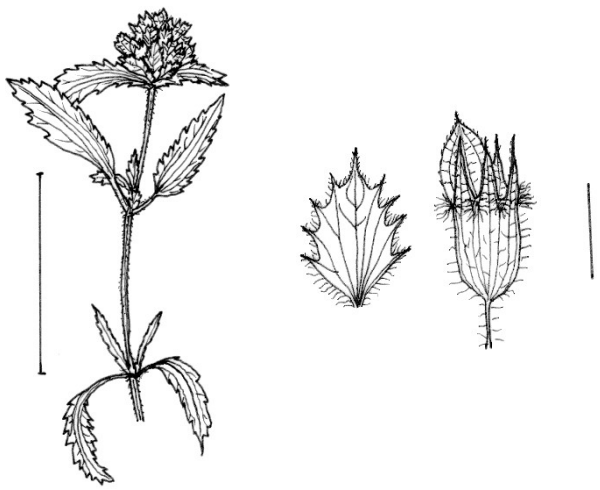
標本：三重県四日市市四日市港　1978 年 5 月 21 日　太田久次 no.11936（KPM-NA0222108）.

文 献

Cronquist,A., A.H.Holmgren, N.H.Holmgren, J.L.Reveal & P.K.Holmgren, 1984. Intermountain Flora, Vascular Plants of the Intermaountain West, U.S.A., Vol.4. 573pp. New York Botanical Garden, New York.

太田久次, 1997. 改訂三重県帰化植物誌. 246pp. ムツミ企画, 津.

太田久次, 2010. 太田久裕編, 新版三重県帰化植物誌. 316pp. ムツミ企画, 津.



図：コバナムシャリンドウ *Dracocephalum parviflorum*
左：全形（スケール 5 cm）中：苞 右：萼筒（スケール 5 mm）